

伝道者を育てる東京神学大学

キリストの福音が、力強く、しかも御心にふさわしく伝えられるために、教会は特別に牧師、伝道者をたててきました。そのような福音伝道者を育てる教育機関は日本にも多くありますが、中でも東京神学大学は、多くの特徴をもつユニークな神学教育機関です。ここでは、6つの特徴を説明します。

1 合同神学校 (ユニオン・セミナリー) としての東京神学大学

東京神学大学のルーツは、明治初期のブラウン塾にまでさかのぼり、東京一致神学校(1877年)、東京神学社(1904年)、日本神学校(1930年)を経て、さらに多くのプロテスタントの神学教育の伝統を吸収しながら、日本東部神学校、日本西部神学校、日本女子神学校が合流してできた神学教育機関です。1949年に新制大学としてスタートした本学は、日本のプロテスタント教会が総力を挙げて育んだ最上の伝統を受け継ぐ、日本基督教団立の合同神学校です。

3 教会に仕える 伝道者を養成する大学

東京神学大学は、日本では数少ない神学専門の単科大学で、教会、キリスト教学校、その他キリスト教関係の施設に仕える牧師、伝道者を育成することを使命としています。本学は、神学部のみならず、大学院をも備え、学士、修士、さらに博士まで取得することのできるプログラムを持っています。



2 高度な 神学教育を誇る

すべての教員が海外でも神学教育を受け、またほとんどの教員が海外の有力な神学教育機関からの博士号を有しています。これら経験豊かな教授陣が、研究と教育にあたっています。もちろん、すべての教員はプロテスタントの牧師であり、教会に仕える神学研究に力を注いでいます。

福音に仕えるために召された者

教授 大住 雄一 (旧約聖書神学)

キリストであるイエスの奴隷として、福音に仕えるために召された者、それが伝道者です(ローマ1:1)。イエス・キリストの奴隷は、キリストの尊い血を代価として、罪の手から買い取られたのです。これまでの自分のことはいっさい捨て去り、犠牲を払ってくださった主人に「命まらごと」仕える。召命を受けたということは、つまり、主人に献身したということ、自分の身を養う「なりわい」を捨て、そのことは主人におゆだねして、自分はいつでも、どこへ行けと言われても、主人に従う態勢ができているということです。

「召命」という言葉が、しかし今日、日本基督教団関係神学校の多くでは語られることもなくなっていると聞いています。召命が語られないなら、キリストへの献身ということもなくなります。「自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め」る(第2テモテ4:3)時代が来ているに違いない。福音を宣べ伝えることよりも自己愛が優先される時代、仕えることよりも仕えられることを喜ぶ時代。このような時代に飲み込まれることなく、終りの日のキリストの出現と御国を望み見つつ、ただ御言葉を宣べ伝え続ける(第2テモテ4:1-2)、そのような献身者が求められています。